

草筆木筆で描く不思議のらんたち

草画帖 42



通
百
十
号



アケビ号です。
通草、
木通、
山女などの
表記があります。

風に乗るあれは山あ女けの笑ひ声び



丁翁



山姫ともいい、丁翁ともいうあけび。



秋の一日一日、しずかに熟す。



ら、ら、ら、歌い、か、か、か、笑う。



夢を啜れば、ほんのりあまい。

わけび

青い実はいいね

これから

紫にゆくんだろう

味も

色も熟して

こらえきれなくなつたところで

か
か
か

笑うのだろ
うね

ら
ら
ら

歌うのだろ
うね

あ
け
び
は

あ
け
び
の

空にぶら
下がり



ある詩人が、あけびはおまえの靈魂のようだと言った。



小味



風もおいしい。光もおいしい。ものの味はみなおいしい。



あけびが熟れて、わたしが笑う。



宇宙もまた一つの笑い（ビッグバン）から始まった。



通草、石榴、毬栗……秋の三果三笑。

草話

アケビには表記が多い。通草、木通、山女、丁翁など。歳時記にはさらに燕覆子、烏覆子、他にも羊開口、荀子、葡藤などの漢名、あけびかずら、おめかずら、かみかずらなどの和名がある。どれを書いてもぴんとこない。それがあの木、あの実らしいところか。

*

宮沢賢治の「春と修羅」冒頭に

心象のはいろはがねから

あけびのつるはくもにからまり

と、ひらがなで、あけびのつるのくねったような表記がある。実際、蔓もそうだが、あの目にも手にも口にも柔らかい果実はひらがなが似合って、アケビの蔓筆で描くふうらも、自然そんなふうになる。

*

西脇順三郎の「旅人」という詩には

汝は汝の村へ帰れ

……(略)……

あけびの実は汝の靈魂の如く

夏中ぶらさがつてゐる

夏の実だからまだ青く、旅人は帰郷してその靈魂を熟せ、とでも言うのだろうか。

*

アケビも詩を詠む、口を開いて、やさしく笑う。言葉ではいい尽くせない甘味妙味を秘めて。



通草の実

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第42号 2021年10月25日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008